

フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト ● 北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有 (2014-2017)

### プロジェクトの目的

本プロジェクトは、フォーラム化に向かう民族学博物館と文化人類学の趨勢をいっそう加速させる学術調査を実施することで、新たな理論的展望を拓くことを目的とする。具体的には、国立民族学博物館（以下、民博）を中心に日本国内外の博物館が所蔵する北米先住民資料を対象としながら、以下2項目を実施する。

第1に、欧米や日本の博物館や研究者とともに文化人類学的ドキュメンテーションを検討する国際共同研究を組織し、資料を制作し使用してきた人びと（ソースコミュニティ）の意見を反映させながら各機関の所蔵資料の熟覧を行う。既存の資料情報や資料分類をソースコミュニティの文化的文脈に則した見解と照合することは、アカデミアとソースコミュニティという2つの異なるコンテキストにおける知、つまり、研究成果としての資料情報と伝統的知識とを連動させることを意味する。つまり博物館においてもソースコミュニティにおいても、これまでの情報や知識の継承とは異なる、双方向性に依拠した方法がとられることになる。博物館にとってはソースコミュニティの見解を包摂しながら資料情報を継承することになるし、ソースコミュニティにとっては博物館や研究者による代弁を前提とする資料情報の付与や資料の取り扱いを是正していくような意見を提示することも可能となる。資料情報は熟覧後に加筆され、多言語化される。さらに、資料写真と熟覧の様子をデジタル収録し、フォーラム型情報ミュージアムとして新規に構築するデータベースに統合する。

第2に、カルチャル・センシティビティ（ソースコミュニティにおいて宗教的理由や倫理的理由により秘匿性が高いとされる、取り扱いに注意が必要な物質文化や伝統知）の有無の確認をする。そして資料情報の非公開を望むソースコミュニティの見解に配慮したうえで、問題ない資料についてのみ著作権処理やカルチャル・センシティビティへの配慮といった公開適正化の作業を経てからオンラインで公開する。そしてソースコミュニティを含むデータベースの閲覧者からの書き込みと、それへの反応も含めたさらなる知の継承の展開を図る。その際、各所蔵機関における展示・教育・研究活動への利用ばかりではなく、ソースコミュニティでの活用法も模索する。

### プロジェクトの内容

世界的に見ると民族学博物館は1990年代以降、展示する側・される側・観る側の3者が情報や意見を交換して議論を行う場としての機能を重要視する傾向にある（吉田1999）。また文化人類学においても、ポストコロナル批判や交通輸送手段と情報通信技術の発達を背景として、研究する側とされる側との間で意見や解釈の双方向性を担保するフォーラム化が推進されている（Peers and Brown 2003; 佐々木2011; 岸上2014）。

民族学博物館の所蔵資料は多くの場合、文化人類学の研究計画に基づいて収集され、分類され、資料情報が付され、展示キャプションや図録などを通して情報が再生産されていく。しかしながら資料によっては台帳記載内容が乏しかったり誤記が含まれていたり（齋藤2013）、ソースコミュニティの観点からすると誤りに思えるような記述の混在もこれまで指摘されてきた（伊藤2011）。そのような場合、これまでは主として研究者による資料情報クリーニング作業が行われてきたのだが、これに対しフォーラム化の推進を前提とする場合、ソースコミュニティの直接的関与が不可欠となる。

本プロジェクトでは、民博にソースコミュニティの人びとを招聘したり、民博が他機関へソースコミュニティの人びとを派遣したりしながら調査研究を実施する。ソースコミュニティの人びとは所蔵機関を訪問することで過去に収集された自分たちに関する資料と再会し、研究成果物としての資料台帳の記載事項を確認する。それらの修正や加筆を含め、現在まで継承された伝統的知識に基づく自分たちの見解を、将来この資料や熟覧映像を閲覧するだろう自分たちの子孫に向かって語りかける。既存の資料情報への単なる誤記の修正だけではなく、文化的文脈を再現しながら将来の子孫のために記録を残すのである。別の言葉でいえば、博物館活動の1つの機能である継承を前提とする資料ドキュメンテーションのあり方を、ソースコミュニティとの協働に基づきながら問い直していく試みなのである。

2015年5月現在、本プロジェクトに正式に参加している機関、参加を希望している機関は以下の通りである。国内：野



民博での熟覧は一点あたり約20分。英語とホビ語でコメントが残された。



資料画像や詳細情報の公開を望まない資料（カルチャル・センシティビティ）の存在も明らかになった。



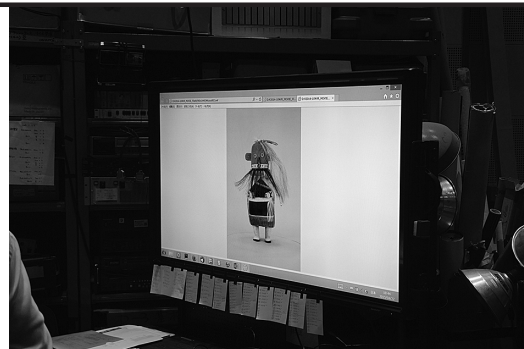
熟覧の様子は全て映像記録化した。

※写真は全て2015年4月の民博での熟覧の様子

海道大学アイヌ・先住民研究センター。国外：スコットランド国立博物館、アムステルダム大学、デンバー自然科学博物館、ズニ博物館、北アリゾナ博物館、国立アメリカン・インディアン博物館。これらの他にも大英博物館、ベルリン民族学博物館、オランダ国立民族学博物館、米国のハード博物館、フィールド博物館、シカゴ大学などにも、フォーラム型情報ミュージアムへの研究連携の働きかけを将来行っていく。



モニター上で回転や拡大が可能な photoVR を用いた疑似熟覧（資料はハンドリングしない）の実験も行った。



## 期待される成果

本プロジェクトによって期待される成果としては、民博および日本国内の博物館が所蔵する資料と、北アリゾナ博物館をはじめとする欧米の博物館の所蔵資料を、それぞれ「ホピ製木彫人形資料データベース（仮称）」と「ホピ製宝飾品資料データベース（仮称）」として構築し、各所蔵機関の展示場での検索用モニターを設置することによって利用を促進することがあげられる。これら2つを包含するフォーラム型情報ミュージアムをオンライン公開し、館外利用に供する。

民博や北アリゾナ博物館やデンバー自然科学博物館などは多数の米国南西部先住民資料を所蔵する。しかしながら、既存の資料情報は記載内容が乏しく、ソースコミュニティの観点からすると記載内容や資料分類は問題があることが多い。本プロジェクトはこうした現状を是正し、ネットワーク化によって博物館およびソースコミュニティの人びとが博物館資料情報を精査できるように環境を整備することで、現状の弱点を補う。

本プロジェクトから得られる成果は、所蔵機関にとっての活用メリットだけにとどまらない。「数百年後の子孫へのメッセージ」として記録されることになった熟覧者による解説映像の制作は、ソースコミュニティにおける伝統文化教育活動への具体的寄与を念頭に置いて、彼らと議論した結果実施することになった。さらに、公開適正化のプロセスを経ることで、データベースの館外利用（公衆送信）において著作権者等ソースコミュニティから生じるクレームを未然に防ぎ、博物館資料を介した伝統文化の普及と継承について、所蔵機関とソースコミュニティとの協働を実現させる。

本プロジェクトは、将来、資料の利用を大幅に増やせる可能性を秘めている。その理由はまず、資料情報が僅少であったために展示利用が困難で収蔵庫で死蔵されていた「モノ」に、ソースコミュニティの記憶を照射することで文化的生命力を回

復させることができるからである。また、懸念事項でありながらも民族学博物館では正面から議論されることのなかった公開適正化作業を制度的に整えていくことも、本プロジェクトの大きな意義である。

本プロジェクトにおいて、博物館資料はソースコミュニティによる文化的文脈の再現や再記録化を通して、モノと語りと熟覧時の映像が一体化した新たな記録物（一次資料）へと改変される。この新たに生じる一次資料は同時に研究者コミュニティにとっては過去の資料情報の再編成（二次資料）としての価値も伴う。博物館資料台帳などに記され、これまで資料管理や展示実践において利用されてきた資料情報をソースコミュニティとともに精査し加筆していくためである。つまりプロジェクト期間中には膨大な一次資料情報と二次資料情報の蓄積が行われる。さらに、ソースコミュニティが熟覧した際に残すコメントは多言語化され、全世界から利用されることを念頭に置いている。

これまで行ってきた民博での資料熟覧（2014年10月、2015年4月）と北アリゾナ博物館での資料熟覧（2015年7月）の結果、モノ資料が保管される民族学博物館に、部分的ではあるがそのモノが作られ使用される環境も映像資料として付け加えられた。民族学博物館は元来、時間と空間を超えて資料と情報を集積し後世に継承する機能を有しているのだが、本プロジェクトはその機能をデジタルメディアの導入やソースコミュニティとの協働や国際共同研究といった手法を統合して展開するため、非常にインパクトのある成果を生む可能性を秘めているといえるだろう。

## 【参考文献】

- 伊藤敦規 2011「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて」『国立民族学博物館研究報告』35(3)：471-526。  
 岸上伸啓 2014「フォーラム型情報ミュージアムの構築」『民博通信』146: 2-7。  
 齋藤玲子 2013「日本北部周辺の先住民資料の理解のために」『民博通信』141: 18-19。  
 佐々木史郎 2011「フォーラム化する文化人類学」『民博通信』134: 2-7。  
 吉田憲司 1999『文化の「発見」』岩波書店。  
 Peers, Laura and Alison Brown 2003. Introduction. In Laura Peers and Alison Brown (eds.) *Museums and Source Communities*, pp. 1-16. London and New York: Routledge.

## いとう あつのり

国立民族学博物館研究戦略センター助教。専門は米国南西部先住民のアートや民族誌資料の知的財産問題に関する社会人類学的研究。論文に「国立民族学博物館における研究公演の再定義」『国立民族学博物館研究報告』39 (3) (2015年)、共編著に『アイヌ・アートが担う新たな役割』（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 2015年）など。



熟覧コメントはテープ起こした後に現地語辞書を用いて校正した。